

「昭和」よ、永遠に。

並行日本新聞

1989年(昭和64年)

1月7日(土)

発行所

弁天舎



info@parallel-nippon.jp

号外

並行日本新聞・号外は左記サイトでもご覧いただけます。

www.parallel-nippon.jp

8月27日(水)より開催の弁天舎特別企画・シモヒロヤス個展『パラレルニッポン』にて全ての号外新聞を展示予定です。

元号継続の政府発表に賛否の声

新しい元号は『しょうわ』であります。」
1989年1月7日14時36分、小渕恵二官房長官が記者会見室で、「昭和」と墨で書かれた2文字を掲げた。会場は一時騒然となり、国内外の記者たちは一斉にシャッターを切った。天皇の崩御は元号の変更を意味する、という長年の常識が、この日、根底から覆されたのだ。

官房長官は、涙をこらえながら、その歴史的決断の理由を国民に告げた。「政府は、この度、『意識保存装置』により、天皇陛下の意識を完全に保存することを決定いたしました。これにより、天皇陛下は肉体は崩御されても、その御心と御意識は、永遠にこの日本に、そして国民と共に存在し続けられます。よって、元

号を『昭和』に継続するに至りました。」
この政府発表の直後、皇太子殿下が緊急記者会見に臨まれた。「この度、天皇陛下が崩御されましたこと、国民の皆様と共に深く悲しんでおります。しかし、政府の決定により、陛下の意識が保存され、昭和という元号が継続されることになりました。」

このことは、精神的な安定をもたらす「激動の時代」に昭和という元号が続くことは、日本人のアイデンティティを保つ上で重要な「意識保存技術が、ついに国家レベルで活用されたことは、日本の科学技術の勝利だ」といった声が上がった。特に、戦後復興を成し遂げた昭和という時代への郷愁や、激動の現代社会における精神的な拠り所を求める声が強く、この決断を支持する動きが見られた。

殿下は声を詰まらせながらも、続けられた。

一方、反対派からは、「天皇崩御で元号を変えないのは前例がない」「皇室の伝統と歴史を無視している」「意識が保存されたとしても、それは本当天皇陛下ご自身なのか」「個人の意識を『永遠の存在』とするのは、倫理的に問題があるのではないか」といった厳しい批判が噴出した。

「陛下の意識が永遠に国民と共に存在するということは、私にとっても、そして何よりも国民の皆様にとっても、大きな心の支えとなると信じております。私自身は、陛下の御心を継ぎ、これからはこれまで以上に、国民の皆様の上に寄り添い、国民と共に歩んでいくことを、ここにお誓い申し上げます。」

皇太子殿下は、伝統的な天皇としての役割に加え、国民の精神的支柱としての新たな重責を担うことを示唆された。殿下の言葉には、国民への深い愛情と、未来への強い決意が込められていた。

この発表は、日本社会に様々な波紋を広げた。賛成派からは、「天皇陛下が永遠に国民と共にあ

る注目を集めている。意識保存技術そのもののへの関心もさることながら、「伝統と先端技術の融合」「国家の象徴の永遠化」という、これまでにない試みに対し、様々な論評が飛び交っている。「イシキトロンOS」が世界を席巻しつつある今、日本の意識解明技術は、個人の延長だけでなく、ついに国家の象徴である天皇にまで適用された。これは、人類が「死」という普遍的な概念に、どこまで科学で挑むのか、そしてそれが社会や倫理にどのような影響を与えるのかという、壮大な問いを世界に投げかけるものとなった。日本は今、歴史の大きな岐路に立っている。



誰もが元号変更を確信していた中で、まさかの「昭和」の文字が掲げられた

弁天舎特別企画

HIROYASU SHIMO SOLO EXHIBITION

シモ ヒロヤス個展2025

PARALLEL
NIPPON

2025 8/27 WED.-9/7 SUN.

OPEN 12:00 - CLOSE 20:00

会場 | 日仏会館ギャラリー
東京都渋谷区恵比寿3-9-25

パスポートチケット/500yen (未就学児無料)